

# 絵画修復家の アトリエから

加賀優記子……絵画修復家

ついでにお話致します。

武蔵野美術大に在学中に、古典絵画の勉強を志した私は、パリに渡りました。パリ国立美大で勉強するかたわら、プライベートの修復工房で修業をしていましたが、1986年に、ルーブル美術館専属修復家、クシエジエンスキー氏に師事し、同美術館契約修復員として92年迄に多くの作品を修復する機会を得ました。

ルーブル美術館天井画ルイ・フィリップの間、デユカの間（ブロンデル作）、ドラクロワ作「サルダナパールの死」、プリュ・ドン作「キリスト磔刑」、



ルーブル美術館／ルイ・フィリップの間、ブロンデル作天井画  
ルーブル美術館修復アトリエ（アトリエ・ベルサイユ）にて、ドラクロワの作品。



ノートルダム・クリュニヤンクール寺院壁画（ミッシェル・デュマ作）、フランス国会議事堂（ブルボン宮）天井画（ドラクロワ作）等々の修復です。他にもベルサイユ宮殿、リモージュ国立博物館天井画等、すべてルーブル美術館の管轄での仕事をやってきました。

ルーブルに勤める様になる迄は、小さな修復工房で見習いをしていました。朝早くアトリエに入り、膠を湯煎する大鍋に火を入れてかじかんだ手を暖めつつ紅茶を入れ、ひとり静かに師匠を待ちながら準備をするという毎日でした。

この時の師匠は大変もの静かな人で、私に膠の湯煎を命じるのも毎日その中に手をつっ込んで膠の微妙な状態の違いを覚えさせるためでした。



ルーブル宮天井画で補彩をする

そんな穏やかな所から一転して巨大な絵画と長い廊下、厳しい貌つきの学者達、多国籍な人々に囲まれながら仕事をするといった環境に変わり、ただでさえ聞き取りづらい早いフランス語が大サロンに反響して指示はよく聞こえない。小さな油彩画から勝手の違う大画面の洗浄、揺れる足場での作業と1000Wの投光器、そして果てしなく続くラボの化学者と修復家の議論……は、時に大きなフラス



補彩用パレット。顔料と合成樹脂またはマイメリ・レスタウロ樹脂絵具等を使用。

め、麻布の継ぎ目からあの悪名高い褐色のビチューム絵具（注）がパラパラと剥落してしまい、私達はやつとその落ちた絵具を定着し終えた処でした。

一連の作業は、アトリエに作品を移さず展示したままの状況で行われていました。そしてここからは、補彩の作業の段階でした。

「度胸だめしだ。一人でやってみなさい。」

師匠は私一人を足場に降りて部下と共に何処かに行ってしまった。少し身動きすると足場はユラユラと揺れ、心臓の動悸にも面相筆は定まりません。ドラクロワのビチュームの固まりは見るからに脆弱で、手指を置くことも、腕杖を使う事も出来なかつたのです。

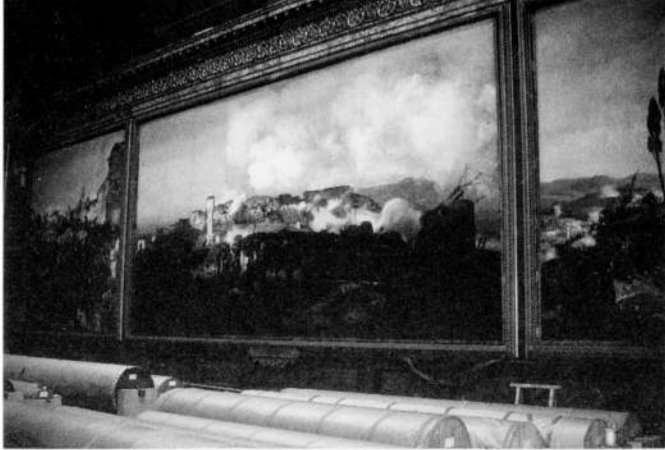
背後には、だんだん人垣が出来ていました。日本人のツアーの音が聞こえてきます。

「あれ、日本人じゃないの。」

私は調色しながら、精神統一しようとして一生懸命でした。

しかし、そんな努力は結局必要なかつたのです。目の前に広がる分厚いニス（注）の深み。微かに鼻腔をかすめる古い絵具の匂い、そして何よりも絢爛たるドラクロワの色彩に、あつという間に心が奪われてしまったのです。

だんだんに人の声は遠のき、画家の筆使いに、彼の生きていた時代に連れ戻された様な気がしまし



ベルサイユ宮殿アフリカの間。下に置かれているロールはすべて絵画（修復を待たれている）。

た。静寂の中で時はスローモーションとなり、その中で一心に私は補彩する事が出来ました。

突然、大きく足場が揺れて、師匠が登ってくるのと、厳しい目つきで補彩の箇所を見つめると、私に向かって黙って親指を立てて見せました。

こうして、新米ルーブル美術館修復員の生活が始まったのでした。（つづく）

（注）ビチューム（Bitumen）アスファルトからつくられる濃い褐色の絵具。これを用いるのは楽しいが、しかし大変危険なものである、というのは決して完全に乾かないからである。18世紀及び19世紀中葉に普及したが、それが当時の多くの絵の致命的な損傷の原因となっている。（西洋美術事典「ビーター&リントナー・マリー著 美術出版社 1967年刊）

かがゆきこ●絵画修復家。大学卒業後、絵画の古典技法を学ぶためにパリに留学。ルーブル美術館の絵画修復員を経て、現在は鶴沼で修復工房を主宰。